

知的障害教育における学習評価から授業改善につなげる フレームワークに関する研究

千葉県総合教育センター

特別支援教育部

研究指導主事 高田 拓輝

研究指導主事 青木 ゆかり

指導主事 土肥 靖人

研究指導主事 稲村 由則

1 主題設定の理由

特別支援教育部では、令和2年度から2年計画で、「知的障害教育における各教科等の指導目標の設定及び学習評価を行うためのツールの開発」というテーマで研究に取り組んだ。

これは「各教科等を合わせた指導（以下、「合わせた指導」という。）を行う場合においても、各教科等の目標を達成していくことになり、育成を目指す資質・能力を明確にして指導計画を立てることが重要となるが、その意識が薄く、指導計画や学習評価等が曖昧になっている」という点が課題であったことからである。

この研究の成果としてデジタルコンテンツをパッケージ化したツールを開発した。構成内容としては「各教科等目標設定シート」や「自立活動目標設定シート」「各教科等を合わせた指導教科等別シート」「各教科等を合わせた指導単元別シート」「個別の指導計画シート」等となっており、学習指導要領の根拠に則って各教科等の指導目標及び指導内容を設定した上で学習評価をすることができるようにした。知的障害教育の経験が浅い教員が教育課程の理解を深めたり、指導から評価までを行ったりする助けとなるだけでなく、知的障害教育に携わる全ての教員が、学習指導要領に則った考え方を確認したり、これまでの指導を振り返ったりするためのツールとしても活用できることが実証された。

しかし、平成29年改訂特別支援学校小学部・中学部学習指導要領の総則では、学習評価の充実として、学習評価の目的等について「単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること」とあるように、学習評価から授業改善につなげる点において、課題が残った。

このことから、知的障害教育課程において、学習評価を授業改善につなげる手続きとしてのフレームワークを確立し、児童生徒の知的障害の学習状況に合わせ、社会自立や職業自立に向けて資質・能力を向上させることのできる教育の充実を図ることを目指し、令和4年度から2年計画で、「知的障害教育における学習評価から授業改善につなげるフレームワークに関する研究」に取り組んだ。なお、本研究におけるフレームワークとは、教育課程のカリキュラム・マネジメントを実施するための「枠組み」を開発し、その「枠組み」に沿って目標設定から指導内容の設定、学習評価を行い、授業改善をするPDCAサイクルそのものを指すことと定義している。

2 研究の目的

知的障害教育課程における学習評価の充実を図り、授業改善につなげることができる手続としてのフレームワークを確立し授業の充実を図ることで、知的障害特別支援学校及び知的障害特別支援学級等で有効活用できるようにする。

3 研究計画

本研究は、令和4年度から令和5年度までの2年計画とする。

令和4年度 (1年次)	<ul style="list-style-type: none"> ・知的障害特別支援学校及び小・中・義務教育学校の知的障害特別支援学級への質問紙調査を実施する。 ・調査結果の分析を基にフレームワーク(試案)を作成する。 ・調査研究協力員(以下、「協力員」という。)によるフレームワーク(試案)の活用や調査研究協力員会議を通して意見等を収集する。 ・講師、協力員の意見等を踏まえ、フレームワーク(試案)の改善等を行いフレームワーク(修正案)を作成する。
令和5年度 (2年次)	<ul style="list-style-type: none"> ・協力員によるフレームワーク(修正案)の活用や調査研究協力員会議を通して有効性を検証する。 ・フレームワークを完成させ、千葉県総合教育センターのWebサイトにて公開する。

4 研究概要

本研究は、講師による指導助言や調査研究協力員からの意見、質問紙調査の結果の分析により、知的障害教育の教育課程における課題を明らかにし、その課題解決に向けて学習評価を授業改善につなげる手続としてのフレームワークの開発を目的としている。

また、フレームワークの有効性や活用法等を千葉県総合教育センターWebサイトに公開することにより、県内の知的障害特別支援学校や知的障害特別支援学級で有効活用できるようにする。

なお、講師、調査研究協力員は以下のとおりである。

(1) 講師

筑波大学 人間系障害科学域 教授 米田 宏樹

(2) 調査研究協力員

県教育庁教育振興部特別支援教育課	指導主事	小西 孝政
県立印旛特別支援学校	教諭	園原 太郎
県立東金特別支援学校	教諭	荒木 誠
県立槇の実特別支援学校	教諭	石井 夏江 (令和4年度)
	教諭	星野 遥香 (令和5年度)
柏市立田中北小学校	教諭	鷹取 哲史
浦安市立浦安中学校	教諭	三宅 亮
成田市立神宮寺小学校	教諭	森 英則 (令和4年度)
八街市立八街南中学校	教諭	石垣 晴美
御宿町立御宿小学校	教諭	仲佐 仁志
袖ヶ浦市立根形中学校	教諭	佐久間 美奈子

*講師及び調査研究協力員は、原則、令和4年度から令和5年度の2年間で

ある。

(3) 調査研究協力校 9校（協力員の所属校が兼ねる）

(4) 調査研究協力員会議

ア 令和4年度 年3回開催

第1回調査研究協力員会議（令和4年7月1日）

研究概要、今年度の研究計画について

第2回調査研究協力員会議（令和4年11月25日）

質問紙調査結果報告、フレームワーク（試案）提案

第3回調査研究協力員会議（令和5年2月10日）

フレームワーク（修正案）提案、次年度の研究計画について

イ 令和5年度 年3回開催

第1回調査研究協力員会議（令和5年6月30日）

研究概要確認、今年度の研究計画について

第2回調査研究協力員会議（令和5年11月17日）

フレームワーク活用実践共有、有効性についての検証

第3回調査研究協力員会議（令和6年1月22日）

研究報告

5 研究内容

(1) 質問紙調査の実施と結果の分析（令和4年度）

県内知的障害特別支援学校の小学部・中学部及び県内小学校、中学校、義務教育学校の知的障害特別支援学級を対象に質問紙調査を実施し、結果を分析した。

ア 調査名

「知的障害教育におけるカリキュラム・マネジメントを意識した学習評価と授業づくりに関する調査」

イ 目的

県内知的障害特別支援学校の小学部・中学部及び県内小学校、中学校、義務教育学校の知的障害特別支援学級における教育課程に関する課題を明らかにするとともに、その解決方法の一つとしてのフレームワーク開発のための基礎資料とする。

ウ 範囲

(ア) 千葉県内の県立知的障害特別支援学校

(イ) 千葉県内の市町村立知的障害特別支援学校及び知的障害特別支援学級を設置する小学校、中学校、義務教育学校（千葉市を除く）

エ 調査対象

県内知的障害特別支援学校の小学部・中学部及び小学校、中学校、義務教育学校の知的障害特別支援学級の学級担任の中から抽出する。抽出数については、信頼レベル 95%、許容誤差±5%を満たすようにする。抽出の方法は、以下のとおりとする。

(ア) 県立知的障害特別支援学校

特別支援学校小学部・中学部の全学級を対象とし、各学級から1名（原則として学級担任を対象）とする。

(イ) 市立知的障害特別支援学校及び知的障害特別支援学級

市立特別支援学校については、県立特別支援学校に準ずる。また、知的障害特別支援学級が設置されている小学校・中学校・義務教育学

校については、各教育事務所管内から、調査対象となる市町村を決定する。

a 特別支援学校

特別支援学校の小学部・中学部の全学級を対象とし、各学級から1名（原則として学級担任を対象）とする。

b 知的障害特別支援学級

知的障害特別支援学級で学級担任をしている教員の中から1名を対象とする。複数の知的障害特別支援学級を設置している場合は、その中の代表者1名（1校1学級）とする。

オ 内容

調査対象者に対し、教育課程上の現状（指導目標の設定、指導計画の作成、学習評価に基づく授業改善）について問う。

カ 調査方法

質問紙調査（郵送による回答返却）

4件法 「非常に当てはまる」、「だいたい当てはまる」、「あまり当てはまらない」、「全く当てはまらない」

キ 期間

令和4年8月22日（月）から9月30日（金）まで

ク 結果と分析

調査対象者1,006人のうち、958人の回答を得た（回収率：95.2%）。教育課程に関する調査結果からは、3観点に基づいた評価（指導と評価の一体化）の充実、評価・振り返りと授業改善に向けた共通理解等、評価等につながる学習状況の記録について課題があることが明確になった。

また、分析を行う過程で、知的障害教育に携わる教員の年齢構成が、20代～30代の若年層の割合が全体で53.5%と半数以上を占めていたり、知的障害教育の経験年数が、3年以下の割合が全体で21.8%であったりし、知的障害の教育課程を実践する上で、課題等を抱えている教員が多数存在することが考えられる結果であった。

これらの結果を踏まえ、知的障害教育の経験が比較的浅い教員が児童生徒一人一人の実態等に応じて育成を目指す資質・能力の三つの柱と3観点に基づいた指導と評価の一体化の下、以降の授業（単元）への関連性を意識できるフレームワークを開発することが必要であると考えた。

(2) フレームワークの開発（令和4～5年度）

ア フレームワーク（試案）の作成（令和4年度）

質問紙調査の結果分析及び、調査研究協力員会議における講師の指導助言や調査研究協力員の意見等から、開発するフレームワークには、

(ア) 3観点に基づいた学習評価ができる（指導と評価の一体化）

(イ) 評価・振り返り、授業改善についての共通理解が図れる

(ウ) 目標を踏まえて学習評価につながる記録がとれる

(エ) 学習評価、改善点等を以降の授業（単元等）につなげることができる

ことを意識して開発を進め、令和4年度はフレームワーク（試案）を作成した。

イ 調査研究協力員によるフレームワークの活用を通じた検証（令和5年度）

第1回調査研究協力員会議では、調査研究の目的を再確認するとともに、実際に入力を行いながら、フレームワークの活用方法について説明を行った。

調査研究協力員会議後、Google ドライブから調査研究協力員がダウンロードし、令和5年7月から8月までの期間にフレームワークの活用を行った。活用を図る中での不具合や疑問点等については、Google ドライブ上の共有ファイルを通して意見交換を行い、その都度フレームワークの修正を行った。

令和5年9月から10月までの期間に調査研究協力校を訪問し、フレームワークを活用した授業実践の様子を参観後、協力員に対して聞き取り調査を行った。授業実践を通して、「一人一人の学習状況の把握ができ、適切な目標や評価につなげることができた」「頭の中の整理ができ、目標から評価まで、指導と評価の一体化ができた」という評価を得ることができた。また、授業後のアンケートでは、「目標と評価を意識した授業ができた」「個々の目標や評価基準が書かれているため、再確認しやすく、記録もスムーズにできた」「言語化することで、より具体的に表現でき、職員とも共通理解がしやすい資料となった」など、3観点に基づいた評価（指導と評価の一体化）の充実、評価・振り返り、授業改善についての共通理解等、評価等につながる学習等の記録についての、フレームワークの有効性が示された。一方、フレームワークへの入力については、「入力する部分が多く時間を要する」「評価規準や評価基準（判断のための基準）について、理解ができていないと作成は難しい」という意見があったことから、フレームワークを活用するための詳しい説明書等が必要であると考え、「手引」にその内容を盛り込むこととした。第2回調査研究協力員会議では、A（各教科）、B（各教科等を合わせた指導）の二つのグループに分かれて、フレームワーク活用についての協議を行った。協議では、他校の実践を聞くことで、授業実践後、十分に活用しきれなかったと感想を話していた研究協力員も、活用方法を知ることによって、フレームワークの有効性に気が付くことができていた。また、第2回調査研究協力員会議の実施後のアンケートでは、質問紙調査で明らかとなった三つの課題についての有効性について問うと、すべての項目で「できる」「ややできる」との回答を得ることができ、フレームワークを活用することで、評価の充実、授業改善についての共通理解等、評価につながる記録について、有効であることが明らかとなった。

ウ フレームワーク（完成版）について（令和5年度）

調査研究協力員会議、授業実践後の情報交換会、アンケート等を参考に、活用のしやすさなどを改良し、完成させた。フレームワークの構成内容は、表1のようになっている。

表1 フレームワーク構成内容

- | |
|---------------------|
| ①活用の手引及び表示設定のためのシート |
| ②手順シート |
| ③教科等実態把握シート |
| ④個別シート |
| ⑤集団シート |
| ⑥個別比較シート |
| ⑦まとめシート |

エ フレームワーク（完成版）の各シートについて（令和5年度）

(ア) 活用の手引及び表示設定のためのシート（図1）

はじめにフレームワークを活用する際の指導形態や実際に扱う教科等、人数を選択する。これにより、エクセル上の設定を行うことができる（①）。また、活用の流れを示した手引をすぐに確認できるよう、外部サイトへ移動できるボタンも設定した（②）。

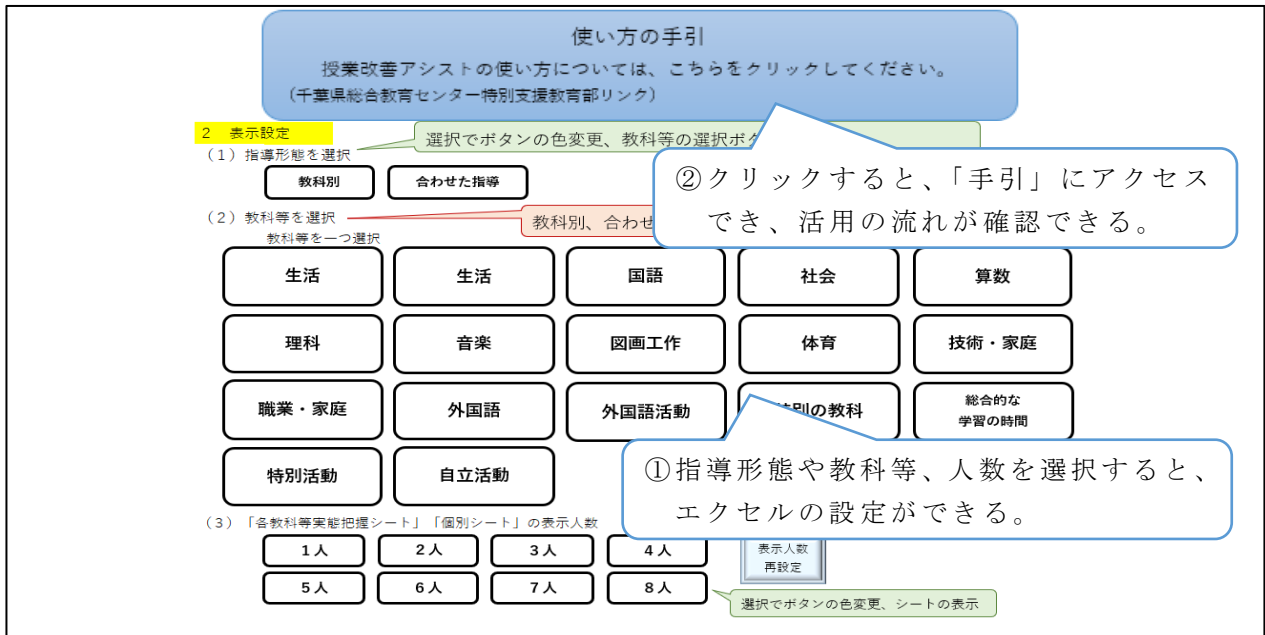


図1 活用の手引及び表示設定のためのシート（一部抜粋）

(イ) 手順シート（図2）

手順シートとして、フレームワークの全体の流れを示すことで、見通しをもって活用できると考える。入力する箇所については、黄色で示されており、途中で手順が分からなくなったときには、このシートで再度手順を確認することで、次の作業へ進むことができるようになっている（③）。また、シートの中の数字の箇所をクリックすると、入力したい場所へ移動することができるようにしたこと、入力の効率化につながっている（④）。

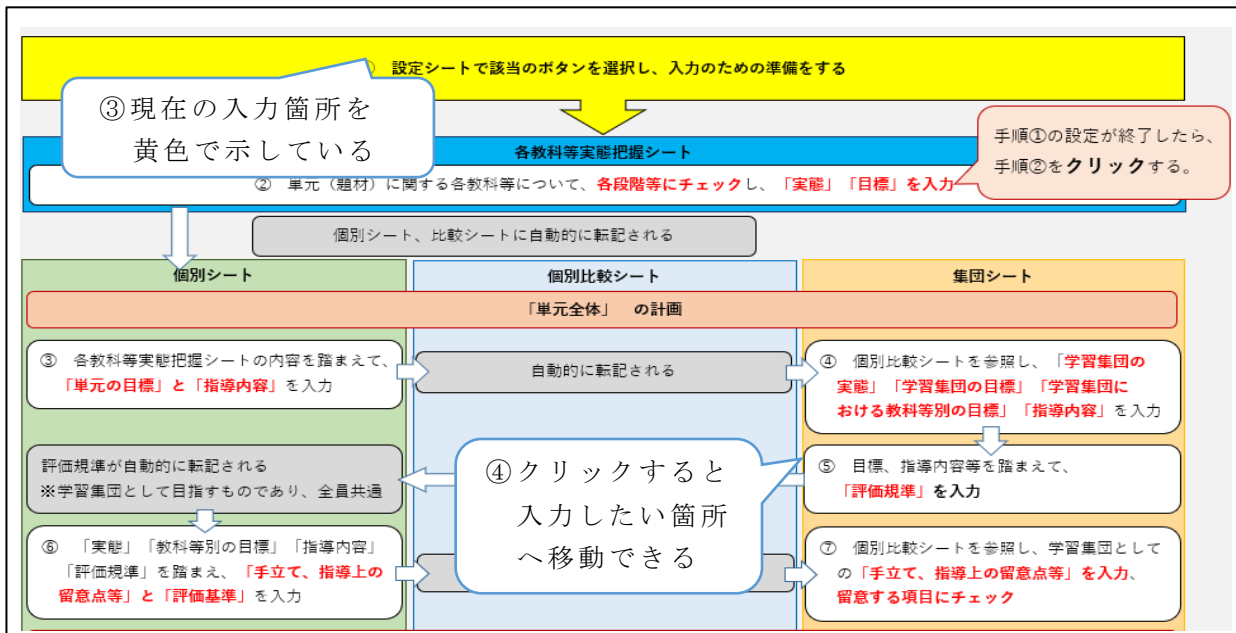


図2 手順シート（一部抜粋）

(ウ) 各教科等実態把握シート（図3）

令和2年度から令和3年度までの調査研究事業の成果物である「各教科等目標設定シート」を基に作成した、各教科等の実態把握に加えて目標設定ができるシートである。

教科等のボタンをクリックすると、知的障害特別支援学校の教育課程の段階表が示され、それを参照しながら、実態把握と目標設定ができる(⑤)。小学校や中学校の学習指導要領、文部科学省学習評価参考資料についても、表示をクリックすることで、各リンクへアクセスでき、確認ができる。(⑥)

目標の入力欄は、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点で評価することを踏まえて、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で考えられるよう3色に色分けすることで、三つの柱を意識しやすくしている(⑦)。また、自立活動については、6区分27項目の中から扱う内容をチェックできるようにし、実態と目標が入力できるようにした(⑧)。

実態と目標は、「個別シート」へ自動で転記するようにし、作業量の軽減を図った(⑨)。

教科等	内容	小学部 (段階)			中学部 (段階)			小学校 (学年)						中学校 (学年)			実態	目標※4		
		1	2	3	1	2	3	1	2	3	4	5	6	1	2	3				
生活 (特別支援学校)	ア 基本的生活習慣			●															・自分が経験した事実を教師に伝えることができる。 ・買物の手順が分かり品物を買うことができる。	「知識及び技能」活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わりで気付くとともに、生活に必要な習慣や技能を身に付けるようにする。 「思考力、判断力、表現力等」自分自身や身の周りの生活のことや、身近な人々、社会及び自然と自分の関わりについて理解し、考えたことを表現することができるようにする。 「学びに向かう力、人間性等」自分自身や身の周りの生活のことや、身近な人々、社会及び自然と自分の関わりについて理解し、考えたことを表現することができるようにする。
	イ 安全	●																		
	ウ 日課・予定			●																
	エ 生活リズム			●																
	オ 生活リズム			●																
	キ 手伝い・仕事			●																
	ク 金銭の扱い			●																
	ケ ぎまり			●																
	コ 社会の仕組みと公共施設			●																
	カ 社会の仕組みと公共施設			●																
サ 生命・自然			●																	
シ ものの仕組みと働き			●																	
自立活動 (※3)	健康の保持	<input type="checkbox"/> ①生活リズムや生活習慣の形成		<input type="checkbox"/> ②病気の状況の理解と生活管理		<input type="checkbox"/> ③身体各部の状態の理解と養護		<input type="checkbox"/> ④障害の特性の理解と生活環境の調整		<input type="checkbox"/> ⑤健康状態の維持・改善										
	心理的な安定	<input type="checkbox"/> ①情緒の安定		<input type="checkbox"/> ②状況の理解と変化への対応		<input type="checkbox"/> ③障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲														
	人間関係の形成	<input type="checkbox"/> ①他者とのかかわりの基礎		<input type="checkbox"/> ②他者の意図や感情の理解		<input type="checkbox"/> ③自己の理解と行動の調整		<input type="checkbox"/> ④集団への参加の基礎												
	環境の把握	<input type="checkbox"/> ①保育する感覚の活用		<input type="checkbox"/> ②感覚や認知の特性についての理解と対応		<input type="checkbox"/> ③感覚の補助及び代行手段の活用		<input type="checkbox"/> ④感覚を総合的に活用した実用状況についての把握と状況に応じた行動		<input type="checkbox"/> ⑤認知や行動の手段がらなる概念の形成										
	身体の動き	<input type="checkbox"/> ①姿勢と運動・動作の基本的技能		<input type="checkbox"/> ②姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用		<input type="checkbox"/> ③日常生活に必要な基本動作		<input type="checkbox"/> ④身体の移動能力		<input type="checkbox"/> ⑤作業に必要な動作と円滑な遂行										
	コミュニケーション	<input type="checkbox"/> ①コミュニケーションの基礎的能力		<input type="checkbox"/> ②意図の受容と表出		<input type="checkbox"/> ③異種の形成と活用		<input type="checkbox"/> ④状況に応じたコミュニケーション												

⑤ 段階の内容を参照できる

⑦ 三つの柱で目標を入力

⑨ 「個別シート」へ自動転記される

⑥ 外部サイトでの確認ができる

⑧ 自立活動についても実態と目標の入力ができる

手順シートへ戻る
(手順の確認)

Bさんの実態把握へ

(参考) 外部サイトへのリンク
 小学校学習指導要領 (平成29年)

(参考) 外部サイトへのリンク
 中学校学習指導要領 (平成29年)

(参考) 外部サイトへのリンク
 特別支援学校小学部・中学部
 学習評価参考資料
 令和2年4月 文部科学省

図3 各教科等実態把握シート

(エ) 個別シート (図4)

児童生徒一人一人の「教科等別の実態」(10)や「目標」(11)、「指導内容」(12)、「評価規準」(13)、「手立て・指導上の留意点」(14)、「評価基準(判断のための基準)」(15)、「学習評価」(16)、「授業者の振り返り」(17)が入力できる。また、期間や内容に応じて、最大四つの時期に分けての入力ができる。

授業改善アシスト 個別シート									
学年・学年等	教科等又は指導形態			単元(題材)名			期間		記入日
年 期	A								記入者
単元全体	教科等	実態把握シートより 【知識及び技能】 【思考力、判断力、表現力等】 【学びに向かう力、人間性等】	教科等 【知識・技能】 【思考力、判断力、表現力等】 【学びに向かう力、人間性等】	指導内容	評価規準 3観点での評価規準 【知識・技能】 【思考力、判断力、表現力等】 【主体的に学習に取り組む態度】	手立て・指導上の留意点等	評価基準(判断のための基準) 3観点での評価基準 【知識・技能】 【思考力、判断力、表現力等】 【主体的に学習に取り組む態度】	学習評価 3観点での学習評価 【知識・技能】 【思考力、判断力、表現力等】 【主体的に学習に取り組む態度】	授業者の振り返り等
	自立活動								
時期1	実態	前期までの課題・改善を要する点	教科等 【知識及び技能】 【思考力、判断力、表現力等】 【学びに向かう力、人間性等】	指導内容	評価規準 3観点での評価規準 【知識・技能】 【思考力、判断力、表現力等】 【主体的に学習に取り組む態度】	手立て・指導上の留意点等	評価基準(判断のための基準) 3観点での評価基準 【知識・技能】 【思考力、判断力、表現力等】 【主体的に学習に取り組む態度】	学習評価 3観点での学習評価 【知識・技能】 【思考力、判断力、表現力等】 【主体的に学習に取り組む態度】	授業者の振り返り等

図4 個別シート

(オ) 集団シート (図5)

学習集団としての「実態」(18)や「学習集団の目標」(19)、「単元の目標」(20)、「指導内容」(21)、「評価規準」(22)、「手立て・指導上の留意点」(23)、「学習状況の評価・授業者の振り返り等」(24)、「課題・改善を要する点」(25)について入力できる。また、個別シート同様、期間や内容に応じて、最大四つの時期に分けての入力ができる。

授業改善アシスト 集団シート									
学年・学年等	教科等又は指導形態			単元(題材)名			期間		記入日
年 期	A								記入者
単元全体	学習集団の実態	学習集団の目標	学習集団における教科等別の目標 単元の目標 【知識・技能】 【思考力、判断力、表現力等】 【学びに向かう力、人間性等】	指導内容	評価規準 3観点での評価規準 【知識・技能】 【思考力、判断力、表現力等】 【主体的に学習に取り組む態度】	手立て・指導上の留意点等	学習状況の振り返り等	課題・改善を要する点	
	自立活動								
時期1	学習集団の実態	学習集団の目標	学習集団における教科等別の目標 単元の目標 【知識・技能】 【思考力、判断力、表現力等】 【学びに向かう力、人間性等】	指導内容	評価規準 3観点での評価規準 【知識・技能】 【思考力、判断力、表現力等】 【主体的に学習に取り組む態度】	手立て・指導上の留意点等	学習状況の振り返り等	課題・改善を要する点	

図5 集団シート

なお、本フレームワークについては、(エ)個別シートと(オ)集団シートを行き来しながら入力をすすめることで、指導と評価の一体化を図ることができるようになっている。

(カ) 個別比較シート (図6)

個別シートで入力した「目標」や「指導内容」等が転記されるようになっており、作成している人数分を、一覧として確認ができるようになっている。また、時期ごとの比較シートも作成される。

授業改善アシスト 個別比較シート「単元全体」									
学年・学年等	教科等又は指導形態			単元(題材)名			期間		記入日
年 期	A								記入者
A	実態	教科等別の目標 単元の目標 【知識及び技能】 【思考力、判断力、表現力等】 【学びに向かう力、人間性等】	指導内容	手立て・指導上の留意点等	評価基準(判断のための基準) 3観点での評価基準 【知識・技能】 【思考力、判断力、表現力等】 【主体的に学習に取り組む態度】	学習評価 3観点での学習評価 【知識・技能】 【思考力、判断力、表現力等】 【主体的に学習に取り組む態度】	授業者の振り返り等		
	自立活動								
B	実態	教科等別の目標 単元の目標 【知識及び技能】 【思考力、判断力、表現力等】 【学びに向かう力、人間性等】	指導内容	手立て・指導上の留意点等	評価基準(判断のための基準) 3観点での評価基準 【知識・技能】 【思考力、判断力、表現力等】 【主体的に学習に取り組む態度】	学習評価 3観点での学習評価 【知識・技能】 【思考力、判断力、表現力等】 【主体的に学習に取り組む態度】	授業者の振り返り等		
	自立活動								

図6 個別比較シート

(キ) まとめシート (図 7)

集団シートの内容が転記されるようになっており (26)、実態から目標、学習評価までを確認することができ、そこから次の単元等の授業改善を図ることができる (27)。

授業改善アシスト まとめシート

学部・学年・学級等					
教科等又は指導形態		期間			
単元(題材)名					
記入日		記入者			

単元(題材)における学習集団の実態	②⑥ 集団シートから自動転記される				
	②⑦ プルダウンで評価の入力ができる				
課題・改善を要する点					
単元(題材)の評価 (○十分である △検討が必要) ※必要に応じて下段にメモを入力					
時期	時数	単元構成	学習グループ	教材・教員	手立て

図 7 まとめシート

(3) フレームワークをより使いやすくするために (令和 5 年度)

ア 名称について

フレームワークは、「枠組み」を指す言葉でもあるので、開発したツールの名称を「知的障害教育課程の授業改善アシスト (以下、授業改善アシストという。）」とし、より、周知ができるようにした。

イ 「手引」について

調査研究協力員からの「入力箇所が多く、分かりにくい」「評価をどう考えたらよいか」という意見を基に、特別支援教育の経験が浅い教員や初めてツールを扱う教員にとって活用しやすいものとなるように、授業改善アシストの詳細な説明等を入力した「手引」を作成することとした。

「手引」の構成は、以下のとおりである。

(ア) 学習評価について

評価の基本となる観点別学習状況の評価についてや評価規準、評価基準 (判断のため規準) について、具体例を示した。

(イ) 学習評価についての Q & A

観点別学習状況の評価や、評価の際の配慮点など簡潔に示した。

(ウ) 入力の流れ

手順表に準ずる形で、流れに沿って入力のポイントを示し、確認をしながら入力できるようにした。

(エ) 授業改善アシスト活用の Q & A

調査研究協力員からの質問を基に Q & A を作成し、より活用できるようにした。

ウ 「記載例」について

調査研究協力員から「どのような内容を入力すればよいか、具体的に分からない」といった意見があったことから、協力員が入力した授業改善アシストを基に「記載例」を作成することとした。「記載例」には、知的障害特別支援学校、小・中学校等の知的障害特別支援学級の教科指導、各教科等を合わせた指導など、様々なパターンの事例を掲載し、作成の際の参考にできるようにした。

6 研究のまとめ

(1) 成果

本研究では、質問紙調査と調査研究協力員の意見を基に、知的障害教育の教育課程等に関する課題を明らかにし、知的障害を有する児童生徒一人一人の実態把握から学習評価までを行い、授業改善につなげることができるツールを開発することができた。また、調査研究協力員による授業改善アシストの活用と授業実践から、主に次のような有効性が示された。

ア 一人一人の学習状況の把握から、適切な目標設定や3観点に基づく評価につなげることができる。

イ 適切な記録や評価を基に、関係教員との情報の共有を図ることで、授業改善につなげることができる。

授業改善アシストは、知的障害教育の経験が浅い教員が教育課程の理解を深めたり、実態把握から評価、授業改善までを行ったりする助けとなるだけでなく、知的障害教育に携わる全ての教員が、学習指導要領に則った考え方を確認したり、これまでの指導を振り返ったりするためのツールとしても活用できると考えている。

(2) 課題

授業改善アシストは、実態把握から学習評価、振り返りなど、日頃から頭の中で整理したり、会議等で話し合ったりしている内容をアウトプットし、可視化する必要がある。そのため、入力する内容が、多く感じられる点が課題である。円滑な運用に向けて、授業改善アシストを活用することの有効性を広く伝えることが必要である。

(3) 今後に向けて

令和5年度2月末には、県総合教育センターのWebサイトで公開する。併せて「手引」及び「記載例」も掲載し、より多くの教員が授業改善アシストを活用できるようにする。また、授業改善アシストの内容や有効性をまとめたリーフレットを県内の特別支援学校及び小・中学校等に配付し、周知を図る。次年度には、当センターの推薦研修において授業改善アシストを活用した実践研修を行い、有効性を広めていく。

授業改善アシストを活用することによって、県内の知的障害教育に携わる教員の専門性向上の一助となることを願っている。